

## ■「九死に一生を得た鹿島槍ヶ岳・東尾根」 ～標高差1,000mの滑落～

翌1999年も1月に小同心クラック、2月に赤岳主稜とバリエーションルートに登っていた。そして4月3～4日で鹿島槍ヶ岳の東尾根を計画した。これは残雪期ならではの好ルートである。鹿島槍ヶ岳の登山口、大谷原から林道を進み、間もなく東尾根に取り付き、尾根に出たからは一の沢の頭、二の沢の頭を越え第一岩峰、第二岩峰を攀じ登り鹿島槍ヶ岳の北峰に達するという長いコースである。



メンバーはリーダーT、M、そしてKさんと私の4名だった。3日の朝方まで小雪が舞っていたが、その後は回復し4日は終日快晴となった。

この時はヒヤリハットではなく遭難事故だったので、当時所属していた山岳会で事故報告書をまとめた。その中で自分が綴った部分を抜粋する。

『・・・12:10一の沢の頭発。ここから先はいよいよバリエーションルートらしくなってきた。13:00二の沢の頭着。一の沢の頭よりも狭い雪原だった。先に着いていた2パーティの横に、我々もシャベルで雪のブロックを切り出しそれを積み上げたりして、2時間近く奮闘しテントを張った。・・・明日のルート、以前ここに来たことがあるという登山者の説明を受けながら、改めて東尾根を見上げその迫力を感じていた。4日7:00二の沢の頭発。出発にあたりモタモタしてしまい最後発となった。雪の斜面のトラバース、そしてすぐに直登となり、かなり息があがったがクラストした雪面にアイゼンがよく効いた。いったん平になった場所でロープを結び、T・M、私・Kのパーティになった。そこから先はさらに急登となり、スタカット登攀で進んだ。やがて第一岩峰に着いた。ピッケルを雪中に深く差し込んで確保支点にしたり、第一岩峰は灌木に支点を取り通過した。その先は雪面ばかりで、晴で気温も上がってきており、雪崩などに対する不安もあり早く上に出たかった。・・・

直登を終え、斜度50度程の雪面のトラバースとなった。ここを越えれば平らな所に出るはずで、そ

こまでは休憩もとれないと思った。・・・雪は緩かった。アイゼンを蹴り込み慎重に進んだ。

・・・Kが私の横に達したが、かなり疲れていたのかピッケルの持ち方が悪く雪面にも打ち込むことなく登って来ていた。私が、キチンとピッケルを効かせるようにと言った。にもかかわらず1～2m進んだ所で、柔らかい雪にアイゼンが効かず足を20cm程滑らせた。再び私が気合いを入れていけと声をかけた。Kが私から8m程進んだ時、12:25 標高約2,600m地点(第二岩峰手前)でKの足元の雪が崩れそのまま滑落。私が確保できずとともに滑落。200～300m程雪の急斜面を滑落した後、雪崩を誘発し雪崩とともに流された。雪が重かったためか2名ともに上半身が雪面から出ていた。斜度の緩い部分で私が止めようと試みるも、雪崩の圧力にどうすることもできず、最後は狭くて急な斜面に雪崩とともに巻きこまれた。しかし、12:35 標高1,600m辺りでロープが雪の塊に引っ掛かり、先ず私が流れている雪崩の一番端に押し上げられてとまった。ロープがピンと張りつめKも止まった。・・・』

この後二人ともに歩くことができ、大谷原の駐車場まで2時間ほどかけて自力下山した。その途中で上に残ったTと連絡が取れ、雪崩は春先特有の一辺30～40cmのブロック雪崩だったが、それと一緒に流されていく自分たちを見ていたTとMは呆然とし、自分たちはもう駄目だろうと思っていたようなので、自力下山することを伝えると大きく安心した返事が返って来た。Tたちは頂上には向かわずに、昨日から登行していたルートを戻って下山すると言う。気温が上がりさらに緩くなった雪尾根の下山には心配が湧いた。また、T達は自分たちが滑落した直後に山岳会の会員に連絡を入れたり、警察署に救助要請をしていたようだ。自分たちと連絡が取れ、その旨警察署に伝えると、救助隊員が既に集められてヘリコプターが飛ぶ寸前だったらしい。

後日、自分が直接警察署に連絡し、「お騒がせして申し訳なかった。」と言うと、「いいんですよ。何より無事でよかったですね。」という返事をいただいた。心身ともに弱っていた自分の内で、その言葉は涙が出るほど優しく響いた。

Kさんはほとんど無傷だったが、自分は右腕に広く擦り傷を作っていた。そして首が痛かった。ムチ打ちかなと思ったが、実はかなり重症だった。駐車場に着くなり動けなくなってしまっていた。翌日病院での診断の結果は頸椎損傷だった。首の骨の何番目と何番目の間に軟骨が少し飛び出していた。入院を勧められたが、新年度を迎えたばかりで仕事を休むわけにはいかなかった。結局半年程通院した。

事故の原因はさまざま検討されたが、結局は自分が確保できなかったことに尽きる。確保できなければロープを結ぶ意味がないのだ。

高さ1,000m滑落したにもかかわらず無事だったのは、運が良かったのだと思っている。滑り落ちて行った経路全てが雪で埋まっていたこと、雪質が重かったこと、そして奇跡としか言いようがないが、大きな雪の塊があり、ロープがそれに引っ掛かり途中で止まったこと。それでなければ緩くなった斜面で雪崩が止まり、実際に自分たちが止まった所から50mほど下にデブリができ、そこに埋まったかも知れないのだ。

久しぶりに報告書を読み、当時の状況が生々しく思い出され息苦しくなってしまった。

この遭難事故からの数年間、雪の斜面が怖くて仕方がなかった。トラウマのようになってしまっていた。今でもそれを完全に克服できていない部分はある。また疲れが溜まると首筋が重くなる時もある。それでも山に登りたい。山を歩きたい。(次頁に滑落経路の写真掲載)

